

走ることにについて考える時に私が心してきたこと

学校長 渡辺 雅之

ここに古惚けた一枚の賞状がある。東京学芸大学主催による昭和50年1月開催の第18回武蔵野マラソン大会(12km)個人9位入賞(20位まで入賞)のもので記録は44分01秒とある。平凡な私の記録ではあるが、卓球のために走ることを位置付けし、卓球のための走り方を追求した結果として大変満足している。順位などは、陸上競技部員が多数オープン参加して、私の前を走っているので全く実感はない。普段の卓球の練習はもとより走る時も自前の1kgの砂袋を左右の足首につけており、走ることは手段でしかなかった、と思う。

大学院に進み、手段としての走るとは実験対象となっていく。運動量を揃え、生体に同じ負荷をかけるには最適の手段であった。最大酸素摂取量や最大心拍数を求めたり、オリンピック選手の体力水準を調べたり、栄養条件を変えての(糖質の摂取割合や塩分量等)生体応答、タウリンやグルクロノラクトン摂取が生体に及ぼす影響、ラットを用いてのモデル実験等、運動生理学・スポーツ科学上の主たる実験手段であった。

やがて競技に直接的に関わる機会も増え、マラソンランナーの暑さ対策や卓球選手の競技特性に応じた体力づくり等の研究も並行していった。北海道マラソンでの谷口選手(旭化成)の担当として水分補給の実態調査や直腸温測定に携わり、世界陸上マラソンで日本初の金メダル獲得(1991年)にことのほか喜んだ。日本卓球協会のスポーツ医科学委員として世界選手権に同行し、体力づくり担当としての成果を垣間見ることができた。

また、健康・体力づくりとしての走・歩の安全性の問題(循環器系や筋肉、関節等生体への危険性)への関心から運動処方としての走るとを研究していった。が、走ることのすぐ横にしかない自分には気づいていない。

たまたま居を武蔵村山市に移していたところで同じ市在住の有吉正博先生(本学陸上競技)から帰宅ジョグのお誘いがあり、玉川上水沿いの木陰道を楽しく走ったことがきっかけとなり、手段としての走ることが自身の目的に徐々に切り換わることとなったように思う。伊能忠敬ばりに日本一周を企てた中高年(平井・杉山両氏)を追い掛けたの調査をやはり有吉先生から提案があり、日本各地で二人を追い掛けたり、100kmを走るという企画が北海道サロマ湖であるということで、(株)ランナーズの後援を得てランナーの血液性状の変化から100kmもの距離を走ることの生体への影響を調べることとなった。サロマ湖では結局10年間調査研究を継続できた。

マラソンの大衆化も進行し、その極であるホノルルマラソンを10回ほど走らせていただいた。市民ランナーと呼ばれる層のコーチとしての活動を通じて下工垣敬一・佐々木一三(両氏とも当時都庁所属)という知己を得、今日に至る交流を通じ多くの走友との出会いが生まれた。手段としての走りは完全に自己目的化したと思う。

伴走も経験することができた。ある時は練習会で、合宿で、フルマラソンで、ウルトラランニングで、と。パラリンピックマラソン金メダリストの柳川春巳さんや福留史朗さんとも親しくなれた。伴走を通じて学んだことがその後の「障がい者スポーツ」研究への関心を抱かせ、私のメインテーマの一つに連動していった。

ランニング学会において韓国でのマラソンブームを話題とし、その原動力となったソウルマラソンクラブ会長(当時)朴永石さんに辿り着き、招待講演をお願いした。学会後も私は日韓を何度も往復して同クラブと交流を深め、韓国における走る企画の実践(ソウル西大門刑務所～臨津閣までのピースラン、釜山～光州民主化抗争メモリアルラン)等を通じ、日韓の平和から世界の平和へ、歴史認識の共有や友情を課題としてともに走ってきた。そして李さん、申さん、金さんら無二の走友を得た。鳥取県日南町での新しい企画(後述)に参加してもらい、日本側もソウルマラソンクラブ企画に参加して交流を続けた。単に走るのではなく、交流を通じて走る意味を考える良い機会となった。

海外のマラソン大会への出場やコーチ・引率を通じて走ることの文化について考えるようになっていったことも幸運と言えるように思う。例えば、スパルタスロン(アテネ～スパルタ間246km、36時間以内)でドロツクスさんとテッシーさんご夫妻、それにマノスさん(ギリシャ)等と選手のサポートをし、この歴史的な試みを支えた。また、世界最古にして最大のウルトラレースであるコムラツズマラソン(南ア、96km)を走ったことで駐日南ア大使との交流が生まれ、実は大使は卓球選手であったことから卓球仲間ともなった。ニューヨークシティマラソンを走り、一クラブがこれほどの大会(約3万人規模だが、フレッド・リボウさんは最大の大会でなく最高の大会をと言う)を行政等の協力得て開催し得ることを体感した。そのことが逆に今の「東京マラソン」の在り方、NYCマラソンと異なるトップダウン式に嫌気がさし、批判的だからエントリーしないこととなる。加えて、各地での人々の走ることにへの畏怖・敬畏によって肌感覚から得た「走る文化」を何とか日本にも定着させたいと幾度も感じていくこととなった。特に走られる側への意識の持ち方を論理化しよう、と。

事件は2003年の東京国際女子マラソン記念大会でおこった。この年は25回大会を記念して1回限りの市民マラソン併設となった。資格タイム(女子:3時間30分以内、男子:3時間15分以内)を持つ者だけが抽選で走ることができた(男女合わせて2,700名)。合計3,000名が初めて都内を走ることもあって、主催の日本陸連及

び朝日新聞社らは、給水等のボランティア確保に力を入れた。ボランティア講習会に3回以上出席しなければならないという規則にもかかわらず、多くのボランティアが出席してくれた気持ちに反し、日本陸連担当者は市民マラソンの部には水は要らないという暴言を吐いて大混乱になったりした。11月26日の大会当日、その日は予報に反して暑くなり、5km毎の給水ポイントでの水や紙コップが不足に不足し、結果市民のエリートランナーさえ棄権や制限タイムオーバーとなっていた。特に男子は女子の15分後のスタートと言うこともあって、各閉門タイムはそれを考慮しない厳しいものであった。そして、棄権もしくはタイムオーバーを収容するバスが配備されておらず、ランナーは自前でタクシーに乗り合って競技場に戻らざるを得なかった。市民ランナーのゴール地点は競技場外の特設であったが(国際女子マラソンのランナーは競技場内)、そこに市民ランナーは大挙して参集し、タクシー代の請求を口にし始めた。このゴール地点のボランティア責任者であった私はレース状況や諸事情を把握し、担当任務外のことなので本部へ行ってもらった。事件の核心はこの後のことだ。我々の任務は、計測用チップの回収と完走者には「フィニッシャーTシャツ」を、棄権者には「敢走Tシャツ」を配ることである。通常は前者のTシャツを多く用意し、後者の数は少ないものである。ところがこのレースでは上記事情で人数塩梅が逆転しており、敢走Tシャツが不足する事態となった。選ばれしランナーたちはそれまでの不満に加え、敢走Tシャツがないことに激高してしまった。責任者たる私は数十人のランナーに取り囲まれ、一人一人が勝手にわめく、なじるといったことでお話にならなくなった。が、私に手を出すランナーは一人もいない。スタッフにお願いして本部を呼んでもらったが、主催者は出てこなかった。もうTシャツはないことゼッケン番号を控えるようにというメモだけを持たせて。それを伝えると同時か、大量の大判タオルが運ばれてきた。運び入れた係員はここへ運べとの指示だけとのこと、大きな段ボール箱はびりびりに引きちぎられ、中のタオルが抜き取られてゆく。止むなく「お一人1枚でお願いします」の声を発するも、無駄だった。TVでみたような暴徒の略奪シーンそのものであった。ひと騒ぎが収まると次の集団が戻ってきた。またもや敢走Tシャツがなぜないのかの繰り返し、再度本部要請するも誰一人出てこなかった。結局私が矢面となり、ゼッケン番号を控える作業を進めるしかなかった。私は嘆いた。選ばれしランナーでさえこの程度なのか、主催者は一度も混乱の現場に出てこないという無責任ぶりに、「マラソン文化」を創らねば、と思った。

やがて、ディレクターとしてウルトラランニングを主軸に大会を企画実施することが多くなり、「走る文化」をさらに加速して意識するようになり、人権研究とも相まって、走らせてもらう側と走られる側の両面からイベントを捉え直してみた。2000年秋の鳥取西部地震(1995年の阪神淡路大震災と同じマグニチュードの地震だったので)からの復興アピール企画「にちなんおろち全国マラソン大会」(鳥取県日南町にて2001年から開催)を10年間アドバイザーとして関わる事ができた。日南町内だけでワンウェイの100kmコースがとれる広大な山間地で毎年600人以上が参加するレースとなった。ここでは走る側と運営側がともに楽しめるように工夫した。走られる側が疲弊しないように。ホームステイ方式で、地場産業育成のために、華美なことを無理してやらない、等継続性を念頭に置いたものだった。だが、10年間の疲労は大きいようで第10回大会でファイナルとなってしまった。痛恨の悔みであったが、地元の判断を大切にした。

ロードでのウルトラレースとは異なるトラックやキャンパス内と言った短い距離の周回レースの世界、すなわち時間走(決められた時間内に走った距離を競うもの)に着目して、「24時間実験ラン」を1994年から年2回のペースで開催した。実験ランである以上毎回いろいろな実験を行い、ランナーも自分なりの課題を実験することが可能な仕組みを作ってやってみた。同じところをぐるぐる回るだけで面白いのか、との疑問を呈されたり、逆に同じところだから走りやすいとの考えもあり、等と、思考錯誤しながら25回まで実験ランを継続し、その間に「24時間走日本選手権」のパイロット的取組として6回ほど行った。この時間走の試みは多くのランナーをして24時間走の世界へ引き込む契機とさせ、普及に大いに貢献した。やがて、参加者の中から24時間走世界選手権優勝者等が出た。そして、48時間走や72時間走、さらに6日間走という1800年代の歴史的なイベントを現代に蘇らせる試みを行っていった。

本稿の表題は村上春樹さんの本「走ることについて語るときに僕の語ること」(2007)のタイトルから援用したことを付記したい。村上さんはランナーでもある。かつて、「サロマ湖100kmウルトラマラソン」で80kmを超えたワッカの原生花園ですれちがったことがある。モルモットでもある私がゴールし、採血等検査が終わって測定員にまわってしばらくしてから村上さんは元気にゴールされていた。村上さん、ありがとう。100kmの世界まで走ってくれて。こんなにうれしいことはない。

最後に、小職はスポーツは人類を幸せにするかを課題として、スポーツで育てられた人間が世の中に恩返しすべきものとの信念で活動(実践と研究)してきたので、先号に続いて伝統ある附属竹早中学校紀要の巻頭に登場させていただき欣快至極と感じ、あらためて責任の重さに身が引き締まる思いを結びのことばとしたい。